

阿弥陀浄土院と光明子追善事業

渡 辺 晃 宏

一 阿弥陀浄土院の「発見」

二〇〇〇年春、光明皇太后の一周忌齋会が行われた阿弥陀浄土院の、池を伴う遺構が初めて姿を現わした。平城京左京二条二坊十坪のこの地には、庭園の景石と思しき立石が現存する。小字名にも「浄土院」「浄土尻」が残り、しかもここは永く泥田どろたと呼ばれ水はけの悪い池跡に相応しい状況を呈し、江戸時代初期には既に阿弥陀浄土院の故地との伝承が生まれていた。^①『続日本紀』は阿弥陀浄土院が法華寺西南隅にあることを明記しており、『続日本紀』天平宝字五年六月庚申（七日）条。以下、『続日本紀』の条文は日付と干支のみ記す）、史料的にはこの地が阿弥陀浄土院の故地であることはまず動かない。しかし、これまでに

行われた坪の北三分の一ほどの地域の発掘調査では、密集した重複する建物群を検出し、ここが京内でも超一級の遺跡であることが明らかになったものの、池や庭園に関わる遺構は見出されず、阿弥陀浄土院の故地である確証は得られていなかった。^②

今回奈良国立文化財研究所が行った試掘調査は、三本のトレンチ計三五五㎡に過ぎなかったが、蛇行する汀線をもち石敷きや洲浜を伴う池とその中に設けられた中嶋、また池に浮かぶ特異な構造の礎石建物を検出するなど、大きな成果を収めた。^③また、池の堆積土からは、精巧なつくりの金銅製の宝相華文垂木先金具や釘隠し金具、あるいは経軸の軸端金具などの優品が出土した。小面積の試掘調査ではあったが、これによってこの地が七六一年（天平宝字五）

六月七日に光明皇太后の一周忌齋会が行われた阿弥陀浄土院であることが確かめられた。

ところで、従来文献的に阿弥陀浄土院が注目されてきたのは、正倉院文書に断簡となつて残された造金堂所解が、阿弥陀浄土院金堂の造宮に関する史料であるとする、福山敏男氏の整理・復原成果^⑤によるところが大きかった。阿弥陀浄土院の造宮史料であるとする点は、黒田洋子氏の研究^⑥によつて否定され、造金堂所解は法華寺そのものの金堂の造宮文書であることが明らかになったが、このことは阿弥陀浄土院の歴史的価値を何ら損なうものではない。

阿弥陀浄土院を考える上で、黒田氏の研究と並んで重要なのは、光明子の一周忌齋会のために発願された忌日御齋会一切経の書写過程についての山本幸男氏の研究である^⑦。

忌日御齋会一切経については、従来天平宝字四年二月に光明子が発願した坤宮官一切経を転用して進められたという見解^⑧が一般的であった。ところが、山本氏の研究によつて、忌日御齋会一切経は、坤宮官一切経とは別個に、光明子没後に新たに発願書写されたことが明らかになった。その推進者は藤原惠美押勝と孝謙であろう。坤宮官一切経が光明子追善事業の一環であることを重視すれば黒田氏の研究成

果とも符合し、阿弥陀浄土院そのものの造宮も光明子没後の事業であつた可能性が高くなる。これは光明子の信仰だけでなく、当時の浄土信仰の存在形態そのものにも関わる問題であり、阿弥陀浄土院のみで解決できるものではなからう。本稿では阿弥陀浄土院造宮を含めた光明子追善事業の実態を整理することとし、今回の発掘調査の成果の検討と今後の研究の一助としたい。

二 光明子追善事業の構造

光明子の体調に最初の異変が生じたのは、栄原永遠男氏の研究^⑨によれば、七五七年（天平宝字一）九月頃であつた。七五七年九月といえ、橘奈良麻呂の変が結末を迎えてからまもなくの事である。翌七五八年（天平宝字二）七月には病状は深刻化したよう、年末までの殺生禁断が全国に指示される。光明子が最後まで手許に置いていた聖武や不比等の形見を大仏に献納したのはこの前後の六月と一〇月のことだつた（大小王真蹟帳、藤原公真蹟屏風帳）。また、法華寺金堂の造宮が始まつたのは翌年夏頃であり、それは光明子が最後に行つた大事業、法華寺の総国分尼寺化の一

環であった。^⑩ 七五九年（天平宝字三）は造東大寺司写経所ではほとんど写経事業が行われておらず、そのフレキシブルな組織は、法華寺金堂造営に回されているのである。^⑪

光明皇太后の病状はその後持ち直したようだが、七六〇年（天平宝字四）二月一〇日、生涯で三度めの一切経書写を発願する。これは坤宮官一切経と呼ばれている。書写は外嶋院（法華寺の西南隅に位置した庭園を伴う写経施設か）で行われたらしい。前例のないほどのスピードで写経は進められ、これはあるいは光明子の病状と関係があるのかも知れない。病状は徐々に悪化し、三月には病氣平癒を祈って天神地祇が祀られ（三月甲戌（二三日）条）、閏四月には不予によって五大寺に雑菓と蜜の施入が行われている（閏四月丁亥（二八日）条）。

六月七日、光明子は死去し（六月庚申（七日）条）、七月一六日に佐保山に葬られた（七月癸卯（一六日）条。但し、『続日本紀』は「七月」を欠く）。『続日本紀』は天皇ではない光明子の死去をもって巻を変えている。光明子の存在がいかに大きなものであったかを物語る事実である。

さて、阿弥陀浄土院造営を含む光明子追善事業に関わる主な史料は次の通りである。

A 『続日本紀』天平宝字四年七月癸丑（二六日）条

設_レ皇太后七々齋於東大寺并京師諸小寺。其天下諸国、毎_レ国奉_レ造_二阿弥陀浄土画像_一。仍計_二国内見僧尼_一、写_レ称讚浄土經_一、各於_二国分金光明寺_一、礼_レ拜供養。

B 天平宝字四年七月一日東寺写経所解（天平宝字四年御願経奉写等雜文案のうち。正倉院文書続々修一八帙六。

『大日本古文书』編年文書卷一四、四〇九・四一〇頁）

東寺写経所解 申請布施物事

奉写称讚浄土經一千八百卷

（中略）

以前依_二去六月七日宣_レ奉_レ写已訖。仍_レ経師等布施物所_レ請如_レ前謹解。

天平宝字四年七月十一日造寺司主典正八位上

|| 安都宿祿

判官外從五位下御杖連

C 天平宝字四年七月一二日造東大寺司牒（天平宝字四年御願経奉写等雜文案のうち。正倉院文書続々修一八帙六。

『大日本古文书』編年文書卷一四、四〇八・四〇九頁）

造東大寺司牒 造法花寺司（木工寮）

請轆轤工二人

右為引御齋會經軸、件人等切要。仍所請如件。
今具狀以牒。

天平宝字四年七月十二日主典安都宿祿

判官御杖連

D 『続日本紀』天平宝字五年六月庚申（七日）条

設皇太后周忌齋於阿弥陀淨土院。其院者在法華寺西南隅。為設忌齋所造。其天下諸國、各於國分尼寺、奉造阿弥陀丈六像一軀・挾持菩薩像二軀。

E 天平宝字四年七月二七日（三〇日頃）奉写忌日御齋會一切

經所解案（正倉院文書統々修一〇帙七。『大日本古文書』

編年文書卷一五、六三（六九頁）

奉写忌日 御齋會一切經所解 申請用度物事

合心奉写大小乘經律論及賢聖集伝老任老拾伍部伍仟

式伯深拾壹卷肆伯玖拾玖帙

（以下略）

F 天平宝字五年四月二四日奉写一切經所解（天平宝字五年

奉写一切經所解等案帳のうち。正倉院文書統々修三帙四。

『大日本古文書』編年文書卷一五、五二・五三頁）

奉写一切經所解申請物事

合奉写大小乘經律論及賢聖集別生偽疑并目錄外經惣

五千三百卅卷

可納漆韓檀廿四合（備宮形并杓）

十九合檀別二百廿卷

五合檀別二百卅卷

（中略）

淨衣六十二具（衫袴布帶懸襪非者）

卅八具持檀夫卅八人料

二具持香與夫二人料

二具持香水夫二人料

一具燒香舍人一人料

一具灑香水舍人一人料

八具担夫長舍人八人料

以前所奉写一切經、從東大寺奉請嶋院。応用

雜物所請如前謹解。

天平宝字五年四月廿四日

外從五位下行大外記兼坤宮少疏池原公 造東大寺司

|| 主典正八位上安都宿祿

天平勝宝八歳の聖武の死去の歳には忌日齋會は次のよう

なスケジュールで実施された。すなわち、初七日（一七日）

から七日ごとに行つて（四七日はあるいは省略か）、四十

九日(七七日まで)で一旦区切りを付けた後(葬儀・埋葬は二七日と三七日の間)、翌年の祥月命日に一周忌を大々的に行つて、追善供養を終えていた。光明子の場合も七日ごとの齋会の記録はないが、基本的には同じスケジュールであつたとみられる。埋葬は七月一六日で五七日と六七日の間にあたる。

光明子の場合記録の残る最初の齋会は、七月二六日に東大寺と平城京内全ての寺院で行われた四十九日の齋会である(史料A)。そのための準備は六月七日の死去の当日から始まっている。すなわち、光明子が死去すると、造東大寺司写経所において彼女が生前に完成を急いでいた坤宮官一切経の書写事業は、山本幸男氏の指摘のように直ちに中断されて事実上打ち切れ、替わりに四十九日用の經典として称讚浄土經一八〇〇巻の書写が光明子の死去当日の宣によつて開始される(史料B)。書写は造東大寺司の写経所で行われ、七月一日頃までに書写を終え、一二日には経軸の準備に取り掛かつており(史料C)、完成は二六日の四十九日直前のことであつたであろう。

一方、諸国においても各国分寺で挙行する四十九日齋会のために、国ごとに阿弥陀浄土画像を描かせ(史料A)、

また各国の全ての僧尼に称讚浄土經を書写させている(史料A)。従つて、七月二六日の四十九日齋会は、諸国の場合、称讚浄土經の供養と阿弥陀浄土画像の礼拝、というのがその主旨だつたとみられる。称讚浄土經の書写は京内と諸国で共通であるから、あるいは平城京内各寺でも阿弥陀浄土の画像が四十九日用に描かれていた可能性もある。天平宝字四年御願經奉写等雜文案には、六月二三日に造東大寺司から内裏へ六幅からなる阿弥陀浄土画像一鋪が奉請されたことがみえ(『大日本古文書』編年文書巻一四、四〇三頁)、また奉造經仏像所の存在も知られる(同四〇二、四〇三頁)。阿弥陀浄土画像が新たに描かれたかどうかは定かではないが、それが礼拝の対象とされたことは認めてよいだろう。すなわち、四十九日齋会は、称讚浄土經と阿弥陀浄土の平面的な二次元の世界における顕現が目指されたといつてよいであろう。

四十九日齋会が終了すると、一周忌に向けての準備が始まる。まず、諸国においては、国分尼寺に安置すべき丈六阿弥陀仏像と脇侍の菩薩像(観音・勢至か)の造立が着手されたようである(史料D)。

一方、京においては、四十九日以後忌日御齋会一切経が

新たに立案・実施される（史料E）。四十九日齋会における称讚浄土經に相当する役割を、一周忌齋会において果たしたのがこの一切經である。書写は称讚浄土經と同様に、造東大寺司写經所で行われた。当初の目標巻数は五二七一巻、一一カ月余りでの完成を義務付けられた大事業である。その書写経過については山本幸男氏の研究に詳しい。また、従来この忌日御齋会一切經は、坤宮官一切經（光明子が生前に発願し、四十九日用の称讚浄土經書写で中断）をそのまま転用・継続させる形で事業が進められたといわれてきた。しかし、前述のように山本幸男氏の研究によって、忌日御齋会一切經は、坤宮官一切經とは無関係に全く新たに始められたことが明らかになった。藤原惠美押勝の新たな発願によって事業を開始したのである。忌日御齋会一切經の書写は、七六一年（天平宝字五）五月一〇日頃全五三三〇巻として完成し、一周忌齋会の前日の六月六日、二四の漆塗りの韓櫃に分け収められて荘重な行列を組んで阿弥陀浄土院に搬入されることになる。

京におけるもう一つの事業が阿弥陀浄土院の造宮である。法華寺西南隅にあたる平城京左京二条二坊十坪に阿弥陀浄土院の建立と、そこに安置する阿弥陀三尊像と二五体の脇

侍菩薩像の造立が始まる（史料D）。阿弥陀浄土院が光明子生前の造宮開始にかかるとはならないことは、『続日本紀』に「為設忌齋所造」とあること（史料D）を重視すべきであろう。阿弥陀浄土を平面的にはなく、三次元の世界で実現しようとした事業とみることで、諸国における經典書写の記録はないが、一切經供養と阿弥陀浄土の立体的な顕現が、一周忌のための事業であったとみてよいだろう。

このように、京と諸国とでやや違いはあるものの、四十九日用には称讚浄土經（京・諸国とも）と二次元の阿弥陀浄土（諸国。京もか）、一周忌用には一切經と（京のみ）三次元の阿弥陀浄土（京は阿弥陀浄土院と阿弥陀三尊群像、諸国は阿弥陀三尊像）、という荘嚴具が用意されたことがわかる。このような光明子の追善供養の全貌を把握すると、阿弥陀浄土院の位置づけがはっきりする。すなわち、阿弥陀浄土院は一周忌用の三次元の阿弥陀浄土として準備・建立されたことが明らかであろう。忌日御齋会一切經の本格的な開始が四十九日後であることからすると、阿弥陀浄土院の造宮開始は四十九日以後とみるのが妥当であろう。いづれにせよ、生前に造宮を開始していたものを一周忌用に

転用したという可能性はほとんどなくなったわけである。

坤宮官一切経と忌日御齋会一切経が全く別個のものであることが明らかになったこと、史料Dに「為設忌齋所造」とあることに加えて、何よりも、以上に述べたような光明子追善の齋会の全体構造を重視すべきであろう。

七六一年(天平宝字五)六月七日、法華寺西南隅にあたる地に造営された阿弥陀浄土院において、光明皇太后の一周忌齋会は挙行された。そして、翌年以降も祥月命日には興福寺において梵網経講読、一方阿弥陀浄土院で祥月命日から七日間の阿弥陀仏の礼拝を行うことが定められた(六月辛酉(八日)条)。こうした経緯もあってか、平城京が廃絶した後も阿弥陀浄土院の法灯は残ったようだが、鎌倉時代末の一三〇四年(嘉元二)の記録には、「いまハ破壊しをはりて、本尊の三尊、廿五の菩薩はみな当寺の講堂にそおはします」とあり(『法華滅罪寺縁起』所引東大寺日記)、本尊の阿弥陀三尊像と二五体の脇侍菩薩像は全て法華寺講堂に移されていたとある。その後は、阿弥陀浄土院の庭園の石といわれる立石のみがわずかに水田の中に残るに過ぎない状況であったが、二〇〇〇年春、その片鱗が初めて確認されたことは先に述べた通りである。

三 阿弥陀浄土院の今後の課題

残された大きな課題が一つある。それは奈良時代の浄土信仰の形態である。この点についての最も有力なのは井上光貞氏の説^①である。それによると、奈良時代の阿弥陀信仰は、故人の追善を祈る信仰であって、平安時代の阿弥陀信仰のように自己の極楽往生を願う信仰とは本質的に異質であったという。私は井上氏のこの奈良時代の浄土信仰に関する仮説はなお有力だと思う。黒田氏の研究によって光明子が生前に阿弥陀浄土院造営を開始したという明確な証拠はなくなった。さらに本稿で述べてきた光明子追善事業の全体像から考えても、光明子が阿弥陀浄土院によって生前に自己のために浄土世界を実現しようとしたとは考えにくい。その点では井上氏の説の反証となる「事実」が退けられ、その妥当性が裏付けられたかみえる。しかし、黒田氏が論証したのは阿弥陀浄土院の造営に限定された事実であって、井上氏の仮説を直接立証したわけではない点には注意を要する。

というのは、阿弥陀浄土院下層遺構の問題があるからで

ある。従来も、何らかの前身機構を改造する形で阿弥陀浄土院は建てられたのではないかといわれ、その有力候補としては、中嶋院^⑦または外嶋院^⑧が挙げられていた。それらの論拠は、坤宮官一切経の書写に関連して、安都雄足が一切経目錄を法華寺の西南隅に持って来させている事実である。このことは、中嶋院か外嶋院かは別としても、阿弥陀浄土院の地にその前身となる写経施設が所在した有力な証拠となる。

この点に関連して今回の発掘調査によって明らかになった重要な事実がある。それは、阿弥陀浄土院の池に下層の池がある可能性が高いこと、そして阿弥陀浄土院の池中の建物は前身の掘立柱建物を同位置で礎石建物に建て替える形で建てられていること、の二点である。つまり、阿弥陀浄土院はその前身遺構を踏襲し整備する形で造営されているのであり、阿弥陀浄土院で具現した浄土世界が、その下層遺構に遡る可能性が否定できないのである。

この点を考えるてがかりは、阿弥陀浄土院下層遺構の状況、ことに阿弥陀浄土院との連続性の解明にある。そして、下層遺構が具体的に何にあたるのか。史料的に確認されているもの、例えば中嶋院や外嶋院なのか、あるいは未知の

ものなのか。そして遺構の造営主体は誰か。大きくこの三点が今後の阿弥陀浄土院をめぐる課題となろう。

その際、従来あまり注目されてこなかったものだが、加藤優氏が紹介した^⑨ 泉犬養橋三千代の観無量寿堂の存在を忘れてはならないだろう。西宅大刀自^⑩ 泉犬養橋三千代の観無量寿堂↓中嶋院または外嶋院↓阿弥陀浄土院という系譜が私の臆測するところだが、その当否は遺跡の解明が握っている。三千代^⑪ 光明^⑫ 孝謙(称徳)の三代の女性の信仰が奈良時代の歴史を形作ったといっても過言ではなく、阿弥陀浄土院は、奈良時代の仏教信仰のあり方を根本から問いかける日本史上真に貴重な遺跡なのである。

現在阿弥陀浄土院跡の周囲には宅地開発が迫っている。平城京時代屈指の、この日本史上の重要遺跡、阿弥陀浄土院の保存は、私たちに課せられた緊急の課題といってよい。藤原恵美押勝邸の田村第は、住宅地として化してもはや大規模な発掘調査は不可能になってしまった。その轍を踏んではなるまい。

註

(1) 註(3) 後掲、第八〇次調査の概報参照。

- (2) 林宗甫『和州旧跡幽考』(二六八一年)巻四添上郡(「続々群書類従」八所収)に、「浄土院/或人の申、法華寺より坤一町ばかり田中に石あり、かの寺の跡なり」とみえる。
- (3) 左京二条二坊十坪内の従来の発掘調査の成果は次の通りである。

第八〇次調査 奈良国立文化財研究所「昭和四七年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)―法華寺境内・阿弥陀浄土院・中山瓦窯」(一九七三年五月)

第一八三―二一二次調査 「阿弥陀浄土院跡の調査」奈良国立文化財研究所「昭和六十二年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」(一九八八年六月)

第二八二―六次調査 「阿弥陀浄土院推定地の調査」奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所年報 一九九八―Ⅲ」(一九九八年九月)

- (4) 「阿弥陀浄土院推定地の調査」第三二二次「奈良国立文化財研究所」奈良国立文化財研究所年報二〇〇〇―Ⅲ(二〇〇〇年九月)

- (5) 福山敏男「奈良時代に於ける法華寺の造営」(『日本建築史の研究』所収、桑名文星堂刊、一九四三年一〇月。後、綜芸社より復刊、一九八〇年一二月)。

- (6) 黒田洋子「正倉院文書の一研究―天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機」(『お茶の水史学』三六、一九九二年一月)。黒田説を支持する論考としては、栄原永遠男、註(9)後掲論文、杉本一樹「正倉院 文書と経巻」(週

刊朝日百科「皇室の名宝」〇五、朝日新聞社刊、一九九九年五月)がある。一方、黒田説に対する反論としては、鷲森浩幸「八世紀の法華寺とそれをめぐる人々」(『正倉院文書研究』四、一九九六年一月)と、岩佐光晴「伝橋夫人念持仏の造像背景」(『ミュージアム』五六五、二〇〇〇年四月)があるが、いずれも論証過程の一部を捉えた議論であって論拠は薄弱である。もっとも阿弥陀浄土院が追善で造営されたとしても、自己の極楽往生を願う信仰が既にあった可能性が全く否定されるわけではない。

- (7) 山本幸男「天平宝字四(五年)における一切経の書写」上・下(『南都仏教』五九、六〇、一九八八年三月・一二月)。

山本幸男「光明皇太后崩後の藤原仲麻呂政権―一周忌斎一切経書写事業の検討を通して」(直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』中、塙書房刊、一九八八年八月)

- (8) 井上薫「奈良朝仏教史の研究」(吉川弘文館刊、一九七八年一〇月)。

- (9) 栄原永遠男「光明皇太后と法華寺」(『奈良時代の写経と内幕』塙書房刊、二〇〇〇年三月)。

- (10) 栄原永遠男、註(9)前掲論文。

- (11) 黒田洋子、註(6)前掲論文。

- (12) 山本幸男、註(7)前掲論文。

- (13) 称讚浄土経一八〇〇巻の書写については、井上薫氏(註(8)前掲書)、山本幸男氏の論考(註(7)前掲論文)がある。

- (14) 山本幸男、註(7)前掲論文。
- (15) 山本幸男氏の推定(註(7)前掲論文)。
- (16) 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』(井上光貞著作集)第七卷、岩波書店刊、一九八五年二月)。
- (17) 中嶋院説をとるものとしては、福山敏男「大和法華寺」(註(5)前掲書所収)、岸俊男「嶋」雑考」(『日本古代文物の研究』塙書房刊、一九八八年一月)などがある。
- (18) 外嶋院説をとるものとしては、大平聡「五月一日経の勘経と内裏・法華寺」(『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報』二六、一九九三年三月)、宮崎健司「法華寺の三『嶋』院について」(『大谷学報』七一―四、一九九二年八月)などがある。
- (19) 加藤優「如意輪陀羅尼經」の跋語について」(石山寺文化財総合調査団『石山寺の研究』深密蔵聖教篇 下、法蔵館刊、一九九二年二月)この史料で最も注目されるのは、三千代の護持経の印影「西家経」に重ねて光明子が自身の印「内家私印」を捺して、三千代を偲ぶよすがとした点である。この史料については、最近、東野治之「橘婦人厨子と橘三千代の浄土信仰」(『ミュージアム』五六五、二〇〇〇年四月)に言及がある。

	陀仏像と脇侍の菩薩像（観音・勢至か）を造らせる。 〈統日本紀〉
12月12日	・太皇太后（宮子）と光明皇太后の墓を山陵と称し、忌日を国忌として扱うこととする。〈統日本紀〉
12月30日	・この頃までに法華寺金堂が完成し、最終決算報告書が作成される。〈造金堂所解〉
761年（天平宝字5）	
2月	・藤原恵美押勝（藤原仲麻呂）、孝謙の勅により興福寺東院を建立し、東堂に観世音菩薩立像を安置。〈興福寺流記所引延暦記〉
5月10日頃	・忌日御齋会一切経の書写事業が終了。〈正倉院文書〉
6月6日頃	・忌日御齋会一切経五三三〇巻を、二十四の漆塗りの韓櫃に収めて、荘重な行列を組んで法華寺阿弥陀浄土院に搬入。 〈正倉院文書〉
6月7日	・法華寺西南隅の阿弥陀浄土院に於いて光明皇太后の一周忌の齋会を挙行。諸国では国分尼寺に於いて阿弥陀三尊像の礼拝・供養を実施か。〈統日本紀〉
6月8日	・今後光明皇太后の毎年の忌日には、山階寺（興福寺）において梵網経講読を行い、法華寺（阿弥陀）浄土院に於いて忌日から七日間、僧十人を呼んで阿弥陀仏を礼拝させることとする。これらの費用に充てるために、平城京の南の田册町を山階寺に、また同じく十町を法華寺に施入。〈統日本紀〉
6月26日	・光明皇太后の周忌齋会に供奉した人々に叙位。〈統日本紀〉
6月28日	・周忌齋会に奉仕した工人たちに褒賞。〈統日本紀〉
10月8日	・恵美押勝（藤原仲麻呂）、聖武太上天皇のための補陀落山浄土図、光明皇太后のための阿弥陀浄土図の刺繍図像を造り、興福寺東院東堂に安置。〈興福寺流記所引延暦記〉
1304年（嘉元2）	
この頃	・法華寺阿弥陀浄土院は見る影もなく、本尊の阿弥陀三尊像と二十五体の脇侍菩薩像は全て法華寺講堂に安置されている。 〈法華滅罪寺縁起所引東大寺日記〉

〈 〉は出典を示す。なお、本年表は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部平城宮第312次調査現地説明会（2000.4.15実施）の資料用に作成した年表をもとに増補改訂を加えたものである。

阿弥陀浄土院関連年表

736年(天平8)	・光明皇后が一切経(五月一日経)の書写を開始。〈正倉院文書〉
740年(天平12)	・五月一日経の願文を付す作業を開始。〈五月一日経願文〉
755年(天平勝宝7)	・(法華寺)外嶋院において、光明皇后願経五月一日経の勘経(校訂作業)を実施。〈五月一日経重跋〉
759年(天平宝字3)	
夏頃	・法華寺金堂の造営を開始。〈造金堂所解〉
12月23日	・光明皇太后、法華寺金堂造営の由来を記した金版を埋納。 〈法隆寺旧記類聚〉
760年(天平宝字4)	
2月10日	・光明皇太后が一切経(坤宮官一切経)の書写を開始(光明皇太后の死去で書写は打ち切り)〈正倉院文書〉
2月16日	・造東大寺司主典で当時法華寺の造営を担当していた安都雄足が、明日(17日)卯の時に一切経目録を法華寺西南隅に持参するよう、造東大寺司写経所案主の上馬養に牒を送る。〈正倉院文書〉坤宮官一切経に関わるか。
3月13日	・光明皇太后の病氣平癒を祈って、諸神の祭祀を指令。 〈続日本紀〉
閏4月13日	・平城宮で大般若経を転読。〈続日本紀〉
閏4月28日	・光明皇太后の病氣により、五大寺(大安・薬師・元興・興福・東大の諸寺か)に雑薬二櫃・蜜一缶を施入。〈続日本紀〉
5月18日	・平城京内の六大寺(上記に法華寺を加えるか)で誦經。 〈続日本紀〉
6月7日	・光明皇太后死去。〈続日本紀〉 ・直ちに七七日の齋会のために、称讃浄土経1800巻の書写を開始。これに伴い坤宮官一切経の書写は中断し、事実上打ち切り。 〈正倉院文書〉 ・また、諸国には、同じく七七忌日の齋会用に阿弥陀浄土画像を描かせ、僧尼全てに称讃浄土経を書写させる。〈続日本紀〉
7月16日	・光明皇太后を佐保山に埋葬。〈続日本紀〉
7月26日	・光明皇太后の七七忌日の齋会を東大寺と京内の全ての寺で実施。諸国では、国分寺において阿弥陀浄土画像と称讃浄土経の礼拝・供養。〈続日本紀〉 ・七七忌日齋会終了後、一周忌齋会に向けて一切経(忌日御齋会一切経)の書写を造東大寺司写経所で開始(目標巻数は五二七一巻)。〈正倉院文書〉 ・また、一周忌の齋会のために、法華寺西南隅の左京二条二坊十坪に、阿弥陀浄土院の造営を開始し、安置すべき阿弥陀三尊像と二十五体の脇侍菩薩像を造らせる。〈続日本紀、法華滅罪寺縁起所引東大寺日記〉 諸国にも国分尼寺に安置すべき丈六阿弥